

森田康裕さん

(マサチューセッツ大学アマースト校微生物学助教)

ギリシア悲劇とサイエンス

日本はものづくりの国であると同時に、多くのノーベル賞科学者を生んでいるように、科学の国でもある。偉大な科学者の言葉を聞くと、専門分野以外の深い教養に裏打ちされていることを知る。日本は、そうした科学者を今後も輩出できるのだろうか？ アメリカで研究活動続ける森田康裕さんに聞いた。

よかれと思ったことが裏目に

——いわゆる「原発ムラ」や最先端科学での不祥事もあって、科学への信頼感が揺らぎ、科学者の倫理観といったものが問われている気がしますが。

まず、科学が世界を進歩させてきたというおごりを、科学者自身が捨てないといけないと思いますね。

僕は、大学での経験が自身の人生に大きな影響を与えたと思っています。大学では科学者としてのみならず、人間としての生き方や姿勢がどうあるべきなのか

な話が多い(笑)。

入学当初は、「サイエンスで人の役に立ちたい」と思っていたのですが、「ギリシア悲劇」の世界を知るうちに、そして生物学専攻として卒業研究を行なう中で恩師との議論を重ねていくうちに、「サイエンスで人の役に立つ」ことへの疑問がわいてきたのです。人の役に立とうと研究したことが、必ずしも良い結果を生むとは限らない、と。

大学院時代に研究していた寄生虫アフリカトリパノソーマは、サハラ砂漠以南に分布する吸血バエであるツエツエバエによって媒介され、感染するとアフリカ睡眠病になり、治療をしなければ致命的です。同じ寄生虫によって家畜もナガナと呼ばれる病気になるため



●もりた・やすひろ 東京都生まれ。1992年国際基督教大学卒業。ジョンズホプキンス大学にて博士課程修了。メルボルン大学、大阪大学微生物病研究所でポストドクトラルフェロー、助教などを経て、2012年から現職。専門は結核菌の増殖や細胞壁の生合成などの基礎微生物学。

を学べたと感じています。

大学に入る前、周囲にいた先輩たちが、フォトジャーナリストとして海外へ行ったり、海外青年協力隊に参加したりしていて、彼らに憧れを抱いていました。自分も世界へ飛び出して、人や社会の役に立つ仕事になりたい——そう考えていました。

大学では、リベラルアーツ、つまり文系や理系の垣根もなく、さまざまな勉強をすることになり、そこで「ギリシア悲劇」に出会ったのめりこみました。ギリシア悲劇には、悪人は登場せず、むしろ皆よかれと思つて行動したことが裏目に出て悪い結果を招く、そんな

ツエツエバエが生息するところでは牧畜がままならず、サハラ以南の経済にも影響を及ぼしています。

ならばアフリカトリパノソーマを、あるいはツエツエバエを撲滅すれば、病気もなくなり、家畜も育てられる。経済効果も見込める。ふつう、そう考えますよね。そこに悪意はない。むしろ、よかれと思つてその選択肢を選ぶでしょう。科学者もそのように考えて、研究を進めるために、研究費を申請したりします。

ところが、研究が進むと、ナガナによって死んでしまふのはアジア由来の外來牛で、もともとアフリカにいた野生動物にはあまり影響がないことがわかってきました。実際にアフリカに生息している動物の場合、体内にこの寄生虫がおり、共存しながら生きていくことができます。つまり、途方もない時間をかけて共存できるように進化してきたわけです。

もしアフリカトリパノソーマを撲滅すれば、家畜は育ち、経済にも好影響があるかもしれませんが、今度とはもともとアフリカにいた野生動物たちに影響が出ます。生態系に狂いが生じ、野生動物が危機にさらされる。つまり、アフリカトリパノソーマ撲滅は、人間のエゴかもしれない、という見方もできるのです。